

平成29年度 日本大学スポーツ科学部個人研究費 研究実績報告書

所属: スポーツ科学部 競技スポーツ学科

資格: 准教授

氏名: 山本 大

	研究課題	スポーツの戦術的行動分析並びに戦術トレンドの動向 ～サッカー2016 UEFA EURO(ヨーロッパ選手権)および2016 Copa América Centenario(南米選手権)を対象として～
報告の概要	研究目的及び研究概要	<p>【研究目的】 サッカーの攻守の目的は、相手のゴールを奪い、相手のボールを奪うことである。ゴールを奪うことはサッカーにおける攻撃の本質である。またボールを奪うことは守備の本質を表している。最近の研究で、ボールを奪うこともゴール以上に価値があると明らかにされている。しかし攻撃に比べ守備の研究は、調査した限りでは先行研究が少なく不明な点が多い。そこでボール奪取と勝敗について調査した。</p> <p>【研究概要】 本研究では、2016年にヨーロッパ(以下、欧州)とアメリカ大陸(以下、南米)それぞれでおこなわれた国別対抗のトーナメントの大会で、ボールを奪うということに着目し、どのような傾向が観られるか調査した。 調査は、欧州、南米の各選手権大会の準決勝2試合と決勝の3試合あわせて6試合を対象とし、ボールの奪い方と奪う直前がどのような状況だったかを調査した。</p>
	研究成果	<p>【研究結果】 勝つチームのボール奪取数は負けたチームより多いという先行研究と比べ、ヨーロッパ選手権では逆に負けたチームの方がボール奪取率が高かった。南米選手権は先行研究同様勝ったチームのボール奪取数が多かった。しかし、どちらの大会でも負けたチームは前半に比べると、後半のボール奪取数が増える傾向が見られた。ボール奪取の項目で特に増えるのが間接的に奪うパターンの1つである「拾う」である。さらに南米選手権では直接ボールを奪う項目である「カット」も増えている。</p> <p>【今後の課題】 今回の研究は先行研究と異なり、リーグ戦ではなくトーナメント戦の試合を調査したものである。その結果では、ボール奪取の数は、勝利したチームがいつ得点を取りリードしたかということで、先行研究とは違う傾向が見られた。前回、調査したボールを奪う場所と今回の調査結果をまとめるとともに、時間帯別の得失点に与える影響を調査し、ボール奪取が勝敗に与える影響についてさらに詳細に追究する予定である。</p>
研究業績	<p>・論文および著書</p> <p>著者名・論文標題・雑誌名・査読の有無・巻・発行年・ページ数</p>	なし
	<p>・学会発表等</p> <p>発表者名・発表標題・学会名・発表年月日・発表場所</p>	なし
	<p>・その他</p> <p>*学会・競技団体報告書など 著書名・標題・掲載誌名 発表年月・発行所 *講演会、研究会、研修会、セミナー等での講演発表 発表者・発表年月・題目名・講演会名 *社会貢献活動等</p>	<p>社会貢献活動</p> <p>①埼玉県サッカー指導(第4種県技術委員) (期間)2017年4月～2018年3月(毎週水曜日午後19時～21時および土・日・祝日[年間56日]) (内容)U12年代の埼玉県内の選抜選手に対するサッカー指導</p> <p>②埼玉県サッカー指導者インストラクター (期間)2017年4月～2018年3月(毎週水曜日午後19時～21時および土・日・祝日[年間56日]) (内容)埼玉県内のトレセン指導者を対象に指導研修</p> <p>③47FAインストラクター研修(埼玉県) (期間)2018年2月11日～12日 (内容)本学で予定しているサッカーコーチC級の認定者である47FAインストラクターの指導実践研修会</p> <p>④関東U12トレセンコーチ活動 (期間)2017年4月～2018年3月 (内容)U12年代の関東の選抜選手に対するサッカー指導</p> <p>⑤東京都教員専門性向上研修講師 (期間)2017年8月10日 (内容)東京都教員対象の体育実技(サッカー)の指導向上のための研修</p>